

行政職としての博士課程取得の意義

Significance of Acquisition Doctorate Programme for Administrative Position

金子 武 将*

(KANEKO Takemasa)

I. はじめに

研究職であれば、学問を極めてその結果を研究に反映させて社会へ貢献するため、修練の期間として修士課程および博士課程は必要であろうが、行政職として職務に従事する上で、特に博士課程を修了したことはどのような意義を持つのか。就職してからずっと考えてきた。いまだに最終的な考えには至っていないが、簡単に経歴を交えつつ今まで考えてきたことを述べたい。

II. 博士課程入学までの過程

大学を卒業する予定の年度に、就職活動としては国家および地方公務員試験のみ受験したが、見事に全敗となった。また、単位の取り方を誤解しており、気づいたときには卒業に必要な単位が不足し、留年が決定した。ただし、いわゆる農業気象学研究室に所属していた私は、先生のご指導の下、修士課程の先輩、同僚と大分県久住にて気象観測を行い、卒業論文はほぼ書き上げ、発表は済ませていた。卒業条件として、後期には大学への所属が必須であり、取得すべき単位は残りわずかだったため経済的事情で前期は休学し、後期に集中的に単位を取得することとした。休学期間中に何をしていたのか、正直全く覚えていない。親への懺悔の思いから、失意のどん底から這い上がることができずにいた。本来ならば再スタートを目指すべきであったが、就職活動にも身が入らず、農業気象の勉強をしつつ生活および社会経験のためにアルバイトをし、なるべく大学で学ぶ以外の知識を得るために本を読んでいた記憶しかない。そのような生活がずるずると後期も続き、何とか卒業はできたが進路が決まらなかったこと、もう少し農業気象の勉強を続けたい気持ちが漠然と芽生えたことから、修士課程へ進学した。

修士課程在籍中は、公務員試験は片手間で受験したものの就職活動らしい活動はほとんど行わなかった。引き続き久住で主に風や気温の気象観測を行い、研究テーマは上空の風と地表近くの風の関係性であった。

就職先が定まらなかったこともあったが、この頃、ようやく農業気象が好きになりだし、さらに勉強したい気持ちちははっきりと芽生え、博士課程へ進学した。

III. 博士課程入学からの過程

農業気象の分野も広く、今まで行ってきた風を中心とした研究から、今度は中国黄河上流域での凍土へと研究テーマが変わった。研究内容が変わることに多少の不安を持っていたが、私にとっては、この研究テーマの変更が良かったのだと後々気づくこととなる。

農業気象は気象データの収集が命であり、当然ながら中国に渡って気象観測する機会もあった。中国の社会的風景は、日本の都会と地方よりも大きな格差があり、かなり衝撃的な光景であった。

例のごとく就職活動は片手間で、博士課程修了後の身の振り方が全く決まっていなかった。博士課程さえ修了すれば、どこかには就職先があるだろうと甘えたイメージを持っていたが、現実はそのほど甘くなかった。現実が全く見えていなかった。

IV. 博士課程修了から入省までの過程

博士課程修了直後、450万円弱の奨学金の返還義務が生じた。身の振り方が決まっていない私には非常に苦しかった。今も月2万円弱の返還を続けており、生活に影響が生じている。

ただし、幸運なことに職を得ることができた。研究とは全く関係ないが、縁があって熊本県農業農村関連部局の育休代替職員（行政）である。ここでの人との出会い、職務内容がその後の人生を変えろとは、採用された際には思いも至っていなかった。

職務内容は、当時の県内地方振興局で行う諸事業のとりまとめが主であった。農業農村整備事業のハード事業を含め、中山間地域等直接支払制度といったソフト事業にも触れることができた。

素晴らしい上司、同僚に恵まれ、農業農村分野の神髄を垣間見ることができ、行政の道へ進みたい思いが

*内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局



博士課程、行政、農業気象学、専門の応用、博士の有効活用

強くなった。すでに30歳になる年齢であったため、地方公務員試験は年齢制限で受験資格がなく、国家公務員試験を受験した。一次試験は基礎的な試験であるため、別途試験勉強が必要であったが、特に農業農村分野の内容を問う二次試験は通常の業務が試験勉強となったのが幸いし、農林水産省へ入省できた。

V. 今思うこと

「博士」を持っていることで、行政的にどのように貢献できるのかをずっと考えてきた。もちろん、特定の分野の研究・修練を行ってきたため専門性を持っていることにはなるが、農業気象という特殊な分野であるため非常に狭い知見しかなく、広い世界を持つ行政の中でどのように力を発揮できるのか疑問を持っていた。

入省から数年経て受けた研修で、講師から「博士課程を経た人は、他の人と比較してどのような特色を持つか。博士課程を修了する意義とは何か」との質問を受けた。講師は、当然ながら私が博士課程を修了したことなど知る由もなく、たまたま私に質問した。答えが出ていなかった当時、私は「特にない」と答えた。その講師が論してくださったのは、「博士課程を修了した人は、真理を追究しながら一つのことを真摯にやり遂げる力がある。また、専門性だけでなく他の研究に触れる立場が多くなるため、他の人や他の事象を認めることができ、多様性を持つことができる」というような言葉であった。

そのとき、私は吹っ切れた。「農業気象」だけに拘って行政として貢献する必要はないと気づいた。確かに、やり遂げない限り博士課程は修了できない。また、大学時代のゼミを思い返すと、先輩の博士課程の方は、農業気象であっても自身が専門としていない分野でさえ意見や指摘、指導を行うことができていた。他の分野を認めつつ、自身の研究分野を基礎として、それを応用して新たな知識を得ていたに違いない。過年度に携わったダム委員会の場においても、委員の方々は専門分野以外の点でも鋭い指摘をされて^{きょうがく}いた。学問を修めた最たる方々の知識や洞察力には驚愕する。

農業気象専攻というのもあるが、あまり活用しないため構造力学や土質力学などの分野の勉強をなおざりにしてきた。しかし、現場の事業所に赴任すると、農業気象よりもはるかにそれらの分野の方が重要になる。改めて勉強が必要となったが、農業気象分野の考え方を応用すると理解しやすいことに気づいた。実際に、神髄までは理解できていない可能性もあるが、ダム委員会もなんとかやり遂げることができた。他分野の勉強と同様に、行政的な事象に関しても博士課程修了がバックボーンとなって、多様性を認めながら応用

させて成し遂げることができるようになった気がする。博士課程で研究テーマが変わったことも、少しでも世界を広げる良い機会だったのだと思う。

研究成果は、他の人に伝えなければ意味をなさない。行政の世界も説明が重要となる。わかりやすい言葉を用いて端的な説明が求められる。制限時間が決まっており、専門性の高い方々がおられる学会発表、字数制限のある論文の投稿は優良な鍛錬の場となる。一見、理系の博士課程修了者はオタクのように見られ、話し下手であるイメージを持つかもしれないが、専門分野の話となると饒舌^{じょうぜつ}になる。これを応用すると説明が上手になる。人と人のつながりを重要視する農業農村分野の場では、強い武器となると考えている。

今後も考え方を応用させながら、慢心せずに少しでも行政的に博士を有効活用できるように活動したい。

VI. おわりに

近年の入札制度では、技術提案書が重要となっており、その書き手は資格を持った者である。一方で、技術提案書の評価者は、行政経験から得た技術力を持っているものの、社会的に証明できるものがない状況である。その不均衡を是正し、目に見える社会的評価を得るため、技術力向上のために技術士資格等の取得が推奨されている。

コンサルタント業界では、資格取得を目指す際には、職務に専念しなくてよい期間が多少設けられるとのことである。もちろん、行政に携わり多忙な日々を過ごしながら資格を取得される方には感服するが、組織全体の技術力向上を目指すため、前述のような期間を一定程度設けるのも一つの手ではないかと考える。

同様に、行政職に携わりながら、周りの目を気にせずに博士取得を目指せる環境整備も必要と考える。技術力向上だけでなく、その勉強や資格取得により、仕事がやりやすくなるのではないと思う。

なお、本稿の内容は、執筆者個人の見解であり、内閣官房の公式見解を示すものではありません。

謝辞 このような場をご提供いただいた学会、ここまで私を導いてくださったすべての方に厚く御礼申し上げます。

[2021.5.27.受理]

紹介

金子 武将 (正会員・CPD 個人登録者)



2008年 農林水産省入省

2021年 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局